

## オンライン教育推進論に対する批判的考察

徳田季晋

### はじめに

「僕たちは今、地球規模の病気にかかっている最中であり、パンデミックが僕らの文明をレントゲンにかけているところだ。数々の真実が浮かび上がりつつあるが、そのいずれも流行の終焉とともに消えてなくなることだろう。もしも、僕らが今すぐにそれを記憶に留めぬ限りは」<sup>(1)</sup>。

2021年1月現在、新型コロナウイルス感染症（COVID-19）のパンデミックからおおよそ1年が経過した。私が生活の拠点とする大阪では1月14日に2度目の緊急事態宣言が出され、町は飲食店を中心に再び「自粛ムード」となっている。ただし、「緊急事態」「自粛」「三密」「アルコール消毒」など、お馴染みになったこれらの言葉を真剣に受け止めている人はもはやほとんどいないように見える。

素直に告白すれば、私もそうなりつつある1人だ。もちろん私が感染症対策を怠っているという訳ではない。やむを得ず買い物に行くときはマスクをきちんと着用するし、自前のアルコール消毒液も持参する。また、通勤の電車でも可能な限り窓を開けるようにしている（冬の寒い今の時期は窓を開けると誰かを不快にさせてしまうのではないかとひやひやしながら）。しかし、満員電車での大声の会話やテレビのニュースで伝えられる町の喧騒、真面目に感染症対策を考えているものに対する冷笑、こういったものに触れるにつれ私のこの努力にどれくらいの価値が

---

(1) パオロ・ジョルダーノ著、飯田亮介訳（2020年）『コロナの時代の僕ら』早川書房、108頁。

あるのかと考えてしまう。「真面目な人ほど馬鹿を見る」とはまさにこのことだと思わずにはいられないのだ。

恐ろしいことは事態が何も好転していないのにも関わらず、異常だと感じていたはずのことが異常だと感じられなくなりつつあることだ。「この教訓は絶対忘れないよう心に刻もう」そう思った大切なことさえすっかり忘れそうになっている自分に愕然とする。しかし人類の歴史や現在の世相と照らし合わせてみると、こういった健忘症は何も私に限ったことではないのだろう。例えどれだけショッキングなことであれ意識的に（能動的に）それを記憶に残さない限り、私たちは都合の悪い事実を忘れ、そして同じ過ちを繰り返すのだろう。

本稿は教職に就く私の備忘録である。2020年という異様な年を高校生への教え子たちと共に過ごす中で考えたこと、とりわけオンライン授業について、書き記しておきたいと思う。オンライン授業は間違いなく今回の教育の危機を救ったと言えるが、現在それに乗じて過度な教育のオンライン化が叫ばれている。以下ではこういったオンライン教育推進の動きに対して実際にオンライン授業を実施した教員の立場から批判的考察を行い、そして、ささやかではあるが、学校教育の現代的意義についても考えたい。

## 1. オンライン授業の実際

2020年6月21日に内閣府から発表された「新型コロナウイルス感染症の影響下における生活意識・行動の変化に関する調査」によれば、日本の高校生で通常通りの授業をオンライン授業で受講した割合は13.3%、一部の授業をオンラインで受講した割合が36.7%、受講していない割合が50%である<sup>(2)</sup>。要するに日本の約半数の高校生がオンライン授業を経験したということだ。あらゆることがオンラインで開催されるようになった今からすると50%の高校生はオンライン授業を受けられな

---

(2) 「新型コロナウイルス感染症の影響下における生活意識・行動の変化に関する調査」<https://www5.cao.go.jp/keizai2/manzoku/pdf/shiryu2.pdf>（最終確認：2021年2月9日）、22頁。

かったという事実を意識が向いてしまうが、少し前の教育現場の在り方を考えると善戦したと言えるのではないだろうか。

私の勤める私立高校は幸いプロジェクター・タブレットなどの ICT 環境が充実しており、スムーズにオンライン授業を導入できた。期間は 5 月の中旬から末まで。6 月からは午前と午後で分割登校へ移行し、徐々に本来の登校の形に戻っていった。こうして振り返るとオンライン授業を導入していた期間が非常に短かったことに驚かされる。体感ではもっと長くパソコンに向かって授業をしていた気がするのだ。全くの初めてのことで頭を抱えながらも、同僚たちと試行錯誤して乗り切った日々を思い出す。

使用したのは「ZOOM」というアプリだ。授業は学校側がオンライン上でミーティングを設定し、そこに生徒に参加してもらうという単純な形で実施した（もちろんこの単純な形に持っていくまでが相当たいへんだったのだが）。未然にトラブルを防ぐため、参加者が基本的に受け身になり、求められた時だけ発言できるようにシステムに制限をかけた。例えばマイクやカメラは基本的に使用不可とした。マイクを制限する目的は言うまでもなく、多くの音声飛び交って収拾がつかなくなる事態を防ぐためだ。カメラに制限をかけた理由はカメラを許可してしまうとプライバシーの問題（例えば自分の部屋の様子を知られたくない生徒や、自分の顔をまじまじと見られたくない生徒がいる）や画面が重くなるという問題が出てくるためだ。担任を持つ教員は授業だけでなく朝礼と退礼も行い、時間割もほぼ通常通り行った。

実際にオンライン授業を実施して感じたことは「意外とできてしまう」ということだった。もちろん初めの頃は朝礼に遅刻してくる生徒やお昼ご飯を食べてそのまま居眠りして授業に遅刻してくる生徒などもあったのだが、時間が経つにつれそのようなこともなくなっていた。授業に関しても話が伝わっているかを確認する為に特別にマイクの使用を認め発言を求めると、予想外にしっかりした返事があり驚くことも多々あった（もちろん個人差はあるのだが）。インターネットが当たり前の社会とはいえ、通信の安定性や家庭の ICT の環境、あるいはその扱いなどの

個人差を考えるとオンライン授業は無謀だと思われた。しかし、いざやってみるとあっさりと導入でき、そして驚くスピードで生徒もそれに順応していった。現代がデジタル社会であることは百も承知していたつもりだが、それは私の想像を遥かに凌駕するものだったようだ。現代は（それが豊かかどうかはともかく）直接会わなくても本当に何とかなる時代なのだと改めて実感した次第である。

オンライン授業は4月時点で全く生徒とコミュニケーションが取れなかった教員にとって救いであったことは間違いない。というのも、それはカリキュラムをどうこなすかという現実的な問題に対する処方箋にもなったし、何より生徒たちとコミュニケーションをとる手段となったからだ。例えオンライン上であってもその場を生徒たちと共有している感覚は4月の鬱々とした私の気持ちを癒してくれた。多くの教員や生徒にとってもそれは同じであったように思われる。5月の分割登校にスムーズに移行できたのも間違いなくオンライン授業のおかげだ。

今後さらに通信技術やアプリの開発が進み、より快適にオンライン授業が出来るようになるのであろう。そして恐らく、オンライン授業では不可能だと考えられていたあらゆることも出来るようになるのであろう。私は今回のような有事に備えるという意味において、それらの技術発展を願うし、教員もそういった技術の活用法を積極的に学ばなければならないと思う。私たちが今回のパンデミック以上の脅威にさらされない保証はどこにもないのだから

ところで、今回のオンライン授業の成功を機に教育の在り方をもっとオンライン中心に変革するべきだという意見がある。それらの中には参照に値するものも含まれるように思うが、そのほとんどが違和感を抱かずにいられないものばかりである。次章ではその一例を紹介したい。

## 2. オンライン教育推進論

有事の際、その混乱に乗じて社会制度が根本から覆されうるといことは歴史が私たちに教えるところである。第一次世界大戦中に社会主義国家ソ連が誕生した事実はまさにそのことを例証している。今回のパン

デミックにおいても私たちの今後を左右するような大改革が行われる可能性が十分にある。『サピエンス全史』で著名なユヴァル・ノア・ハラリは以下のように述べる。

「今後、多くの短期的な緊急措置が生活の一部になる。緊急事態とはそういうものだ。緊急事態は、歴史のプロセスを早送りする。平時には討議に何年もかかるような決定も、ほんの数時間で下される。未熟なテクノロジーや危険なテクノロジーまでもが実用化される。手をこまねいているほうが危ないからだ。いくつもの国がまるごと、大規模な社会実験のモルモットの役割を果たす。誰もが自宅で勤務し、遠隔でしかコミュニケーションを行わなくなったら、何が起こるのか？小学校から大学まで、一斉にオンラインに移行したら、どうなるのか？平時なら、政府も企業も教育委員会も、そのような実験を行うことにはけっして同意しないだろう。だが、今は平時ではないのだ」<sup>(3)</sup>。

ここでハラリが懸念するように、大改革の波は教育業界にも押し寄せつつある。

実業家（今は YouTuber と呼ぶべきであろうか）の堀江貴文は著書『東京改造計画』の中でこの混乱を機に「年間の教育カリキュラムの7割をオンライン化せよ」という大胆な教育改革を提言している<sup>(4)</sup>。堀江曰、たまたま入った学校の先生に教わるよりも、教え方の上手い先生の授業を個々のレベル・進度に合わせてオンラインで受けた方が効果的で、なおかつ、子供を学校から解放することで子供の才能が開花するのだという。要するにこれを機に学校自体を解体してしまった方がよいということである。この主張は過激でナンセンスに感じられるかもしれないが、ある意味で最も時代に即しているとも言えるのではないだろうか。

文部科学省は2018年に「遠隔教育システム活用ガイドブック」の中で

---

(3) ユヴァル・ノア・ハラリ著、柴田裕之訳（2020）『緊急提言 パンデミック』河出書房新社、34頁。

(4) 堀江貴文（2020）『東京改造計画』幻冬舎、87頁。

より質の高い教育を行うため、専門家によるオンライン授業及び個人に合わせたオンライン授業を推奨している<sup>(5)</sup>。ALT（外国語指導助手）によるオンライン英会話などはまさにこの流れを汲んだものであろう。生徒たちはネイティブスピーカーに自分のレベルに合わせて効率よく学ぶことができる。そのように考えると堀江の提言はこの延長線上にあると言える。ALTのように以前から導入されていたオンライン授業は通常の授業の補助的な位置付けであったが、あらゆる教科の授業がオンラインで可能だと分かった今、それを他の教科にも当てはめ、そしてそれを教育の主軸にするという動きは出てきてもおかしくはない。多様性、平等、個人の自由、個人の権利、そういった言葉が声高に叫ばれる現代において、好きな教員を選び、好きな場所、好きな時間に無理することなく教育を受けられるシステムはあまりにも魅力的ではないか。

確かにオンライン授業は有益である。今回のような有事にも対応できるし、優れた人物の授業を平等に届けることもできる。他にも貧困によって教育が成り立たない地域の子供にも、また、なんらかの原因で学校に通えなくなってしまった子供にも授業を届けることができる。しかし、オンライン主体のカリキュラムのような現在の学校教育の在り方を根底から覆す主張に対しては違和感を禁じ得ない。というのも、実際にオンライン授業を実施した一教員として今実感していることは、オンラインを中心とした教育の可能性ではなく、むしろ、一つの場所に集まり、関係を密にし、一定の規則（制限）に則って共同生活を送るという従来の学校教育の在り方の重要性だからである。もちろんこのように感じている教員は少なくないであろう。しかしながらなぜ今までの教育の方が良いと感じるのかという改まった分析・考察は、混乱の最中ということもあり、あまりなされていないのが現状ではないか。

多くの学校がオンライン授業の恩恵を受けその可能性に気付いた今だ

---

(5) 「遠隔教育システム活用ガイドブック」

[https://www.mext.go.jp/content/20200804-mxt\\_jogai02-](https://www.mext.go.jp/content/20200804-mxt_jogai02-100003178_024.pdf)

[100003178\\_024.pdf](https://www5.cao.go.jp/keizai2/manzoku/pdf/shiryoy2.pdf)<https://www5.cao.go.jp/keizai2/manzoku/pdf/shiryoy2.pdf>

(最終確認：2021年2月9日)、4-5頁。

からこそ、歴史の中で研磨されて来た学校教育の効用を今一度問うべきではないか。オンライン教育という新たな可能性を追求するにしても、その成功のカギを握るのは、従来の学校教育を過去の遺物と一刀両断する短絡的な思考ではなく、そこから謙虚に学ぼうとする姿勢だと思われる。

### 3. 学校教育の効用

オンライン教育が主流となり従来の学校教育の在り方が失われた場合、子供あるいは社会にどのような影響が生じるであろうか。これについては精神面・身体面さまざまな視点で考えることができるであろうが、ここでは特に自由が歪曲化されるという問題を指摘したい。というのも、この問題こそオンライン教育推進に伴う最も重大な問題だと考えられるからである。

まずは素朴に自由の意味について考えてみよう。自由という言葉は現代を生きる私たちにとってたいへんなじみ深い言葉である。「自由に生きよう」「自由な働き方をしよう」といった謳い文句はテレビや広告などを通して毎日のように喧伝されている。その意味するところは単純に「なんでも自分が思うようにする」ということであろう。しかし冷静に考えてみると現実にはこのような意味での自由はほとんど実現されない。なぜなら、言うまでもなく私たちは1人で存在している訳ではないからである。すべての人に無制限に自由を認めてしまうと方々で衝突が起こり社会は崩壊してしまう。仮にこのような自由が実現されたとしてもそれは1人だけが自由に振舞うことができる独裁政治において以外ありえない。

私たちは日々生きる中でどうしようもない閉塞感に苛まれることがある。そんな時に自由になりたいと願う気持ちは誰しも持ちうるだろう。しかしそのような意味での自由は単なる憧れであり空想である。現実として私たちは決して自由ではないし、自由ではありえない。この点で田中美知太郎の指摘は鋭い。

「今日われわれが「自由社会」と言っているものはどういうものかといえば……無政府状態を避けるためにめいめいがその自由を制限し、その制限を一つのルールとして守ることによってただひとりだけが自由なのではなくてできるだけ多くの人が制限された自由を共有する社会のことです。つまりきわめて厳格な制限の下においてできるだけ多くの人が平等に自由を共有し、そういう制限された意味での自由を持つ人がたくさんいる社会のことです。したがってそれは、ある意味においては絶対的な自由の制限ということを前提として成り立っているわけです」<sup>(6)</sup>。

私たちは自由ということを何気なく口にするが実際にはかなり制限された形において自由でなければならないのである。このように考えると私たちが真の自由を享受するためには、自分を含めた社会の構成員の一人一人が、その社会の規則を知悉しなければならないことがわかるであろう。当然ここでいう規則というのは明文化されているものだけでなく、歴史の中で生み出されてきた慣習と呼ばれるような不文のものも含まれる。

さて、では私たちはこのような重要な規則をどこでどのように学んできたのであろうか。家族からであらうか。気の合う幼馴染からであらうか。それとも SNS からであらうか。もちろんこれらも間違いではない。しかし、最もこの学習に寄与してきたものこそ学校と言えるのではないだろうか。

学校では生まれも育ちもまるで違う多種多様な人間が一定のルール(校則)に基づいて共同生活が営まれる。当然その中には自分と気の合わない人物もいるだろうが、学校においては自分とはまったく異なる存在とも上手く付き合っていくことが求められる。子供は自分を表現することを学び、その喜びを通して、他人の表現を受け入れることを学ぶ。自分と他人とのバランス感覚を成功と失敗を通して少しずつ、ほんの少しずつ、培ってゆく。校則とは別に存在するもっと重要で遥かに複雑な

---

(6) 田中美知太郎 (2018) 『人間であること』文春学藝ライブラリー、133 頁。

規則を長い時間をかけて学んでゆくのである。これらの学びは一朝一夕では不可能であり、また、共同生活の中でしかありえない。

果たしてこうした学びは先に言及したオンライン中心の教育でも可能であろうか。画面越しであっても表情や声さえ届けば人の機微の変化に気づく観察力は身につくであろうか。相手をクリック一つで消せてしまう状況の中で、馬が合わない人物ともなんとか折り合いをつけようとする忍耐力は養われるであろうか。全てを自分のペースで進める生活の中で、自分を律し相手を尊重する心遣いは芽生えるであろうか。

このように考えたとき、私はオンライン教育の限界を感じずにはいられない。むしろそこから生み出されるのは他人のことを顧みない我儘で自由をはき違えた人間ではないか。これはもしかすると悲観的過ぎると言われるかもしれない。しかし現在の SNS を中心としたトラブルを目の当たりにするにつれ、そう思わずにはいられないのである。学校がオンライン教育にとって代わった時、そうしたトラブルがさらに増加するという推論はそれほどおかしなものではないであろう。もしそうなれば、自由の腐敗は進み社会は今以上に生きにくいものになると予想される。

以上、まとめておこう。学校教育は私たちが一定の規則を伴った真の自由を学ぶ上で大きな役割を果たしてきた。その要諦は共同生活にあり、それゆえにオンライン教育による代替は不可能であると考えられる。

## 結論

私たちが自由な社会を望む限り教育のオンライン化が進もうと学校教育の重要性が失われることはない。むしろ教育のオンライン化が進めば進むほどその重要性は増していくと言えるだろう。ここに現代における学校教育の意義が認められる。

望もうと望むまいとこのパンデミックを機に教育のオンライン化は加速していくであろう。その流れの中で生み出されるものには当然良し悪しがあるはずで、私たちはそれを適切に選択し運用しなければならない。そのためには今一度私たちがどのような社会を望んでいるかを問う

必要があるだろう。それは未来ある子供たちに何を伝え何を託したいかを問うことと同義である。もちろんここに答えはない。しかし答えがないと分かりつつも問い続ける意志の強さこそ教育に求められるものではないだろうか。教育のさらなる発展はその努力とともにあると私は信じている。

[参考文献]

田中美知太郎 (2018 年)『人間であること』文春学藝ライブラリー。

堀江貴文 (2020 年)『東京改造計画』幻冬舎。

パオロ・ジョルダノー著、飯田亮介訳 (2020 年)『コロナの時代の僕ら』早川書房。

ユヴァル・ノア・ハラリ著、柴田裕之訳 (2020 年)『緊急提言 パンデミック』河出書房新社。

[参考 URL]

「遠隔教育システム活用ガイドブック」[https://www.mext.go.jp/content/20200804-mxt\\_jogai02-100003178\\_024.pdf](https://www.mext.go.jp/content/20200804-mxt_jogai02-100003178_024.pdf) (最終確認：2021 年 2 月 9 日)。

「新型コロナウイルス感染症の影響下における生活意識・行動の変化に関する調査」  
<https://www5.cao.go.jp/keizai2/manzoku/pdf/shiryo2.pdf> (最終確認：2021 年 2 月 9 日)。